

## 甲骨文「齲」字に関する考察\*

戸 出 一 郎\*\*

### 序 言

「齲」字は、史記の扁鵲倉公伝や、黄帝内経素問に表れるが、現存する最も古い史料は、後漢時代の「武威漢代医簡」に見られるものである。従って「齲」字が後漢以前に存在したことは確かであるが、初文の確実な時代については明らかでない。

「齲」の初形が甲骨文にあるとする説がある。この説に対しては批判がなく、現在ではほぼ通説となっているようである。

筆者はこの説に対し、最近、若干の疑問を持つに至ったので、甲骨墨拓より「齲」（といわれる）字（以下（齲））を含む文を集め、更にこの甲骨文字に関する諸家の説を紹介し、筆者の考えを述べて諸賢の御批判を仰ぎたいと思う。

### 文例と諸家の説

1. 御（齲）前，6，54，4（図1）
2. 貞于甲御帚燥（齲）乙，3661（図2）
3. 御（齲）京津，1683（図3）
4. 貞于甲御帚燥（齲）合，232（図4）
5. …女…御…（齲）鄴，3下，35，2（図5）

上記の甲骨文は、甲骨墨拓書中に表れた（齲）に関する卜文である。（齲）については諸家の考証があるので、以下に諸説を紹介し、それによってこの字形について説明する。

于省吾の「雙劍詒殷契駢枝」<sup>1)</sup>中の「釋齲」によ

\* Investigation of the word “齲” (tooth caries) in the Oracle Letters

\*\* Tsurumi University School of Dental Medicine  
Ichiro Tode 鶴見大学歯学部

れば、この字は它に従い、齒に従う字で、齲であると釈してつぎのように説明している。齲は齲，齲と同義である。集韻（宋代の韻書）によれば，齲は唐何切で，馬齒の長いことをいう。また篇海（金代の字書）によれば，齲は齒不正なるをいう。它に従うも佗に従うも同じである。「説文」に齲は齒が参差することで，齒に従い差声であるとある。だから齲齲は齒が参差することをいうのである。



図1 殷虚書契前編



図2 小屯殷虚文字乙編



図3 戦後京津新獲甲骨集

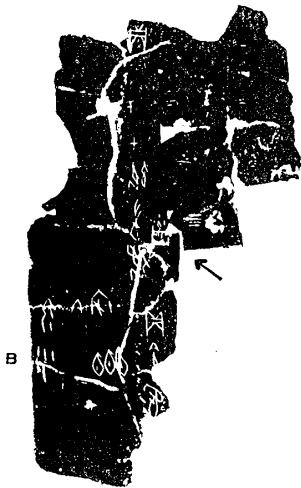


図4 殷虚文字綴合



図6 甲骨文(齧)字

る。

楚辞王褒九懐，株昭に「驥垂兩耳兮中坂蹉跎」とあり，注に蹉跎は失足であると述べている。蹉跎は足についているのであるが，齧齧は歯についているのである。

聞一多<sup>2)</sup>は于氏のこの説を否定した。即ち，初期の文字は一字で往々数義数読あり，後世になってその形を変えて各々区別されるに至ったものである。故に古代の一字はしばしば後世の数字にあたる。即ち「𧈧」の形は，虫，它，蟲，蜀，蝮，蝮，禹と多くの字に分かれたが，もとは一字であって，学者がこれを一概に虫もしくは它と釈すのは誤っている。

春秋時代に作られた秦公設の銘文中に「禹」字が表れるが，その字形は人の手が虫をつかんでいる象で，この虫形は禹の基本形であり，禹の初文である。故に虫形と歯形に従うこの甲骨文字は「齧」であろう。

「説文」に「𧈧齒齧也」とあり，重文を「齧」に作っている。積名の積疾病によれば，「齧齒朽也，蟲齧之齒缺朽也」とあり，篇海には蝮の字があって「齒病朽缺也」丘主切とある。即ち蝮は齧の異文である。虫に従い歯に従うことは契文と同



図5 鄴中片羽三集

じで，この字を齧と決すべきよい証拠である。齧は別に蝮と作ることは，虫は禹の初文であることを証明するものである。

甲骨文に

甲辰卜□貞疾齒佳……，粹1519

(甲辰の日，うらないて□とう。歯を疾めるはこれ……)

とあるが，卜齧は疾歯を卜するのと同じことで，(于氏が言うように)歯が不ぞろいであったり，歯を失ったりしたくらいで，どうして貞卜などするであろうか。

聞一多は以上のように述べて于氏の説を駁している。

その後，楊樹達<sup>3)</sup>は釋齧なる一文を著し，殷虚書契前篇の甲骨文(図1)のこの字は𧈧字であろうと述べている。𧈧は齧にもつくり，今のむしばである。殷人は往々病気に際して御祭を行い，それによって病を禳うのであるが，この辞には残余があるとはいえ，齧字の他に御字があるから，他の疾病に関する契文と同じで，齧は病名であろう。この点では聞一多と同意見であると言っている。

李孝定<sup>4)</sup>は，この字の下半部を歯と認めてはいるが，上半部は禹でも它でもなく，釣針に餌をつけた形の会意文字で，釣の意であるかも知れないがよくわからないと言っている。

高樹藩<sup>5)</sup>は，正中形音義綜合大字典のなかで，この字の上部にある3つの点をむしばの蟲であるとし，中に人があり，下部は歯を象るとし，人の歯が牙蟲により齧食される象であると述べている。

高田忠周<sup>6)</sup>は，この字を齧であるとし，古代に亡逸した字であるという。亀版は前後の文が欠



図 7 秦公設銘文

け、音義が不明であるが、その形は齒に従い、汜に従うことは明らかである。かつ齒は大きく汜は小さい。これは齒が主意をなし、形をなし、汜は字声である。字書に類字がないことから古字逸文であると記している。

白川 靜<sup>7)</sup>は、この字を齧であるとし、形は齒中に虫が入る象であるが、単なる虫の蠹蝕だけを示したものではなく、虫と蠹が結合されてできた字であると推定した。その理由として

虫疾齒佳蠹虎不佳蠹 (齒を疾めることあるはこれ蠹虎なるか、これ蠹ならざるか) 乙、7310

貞出(疾)齒不(佳)蠹 (貞う、齒を疾めること)あるは(これ)蠹ならざるか) 京津 1962

の例によってわかるように、殷代には齒を疾む原因が蠹にあると考えられていたことをあげている。

## 考 察

### 1. 字形から

齧字は齒を部首とし、禹を旁とする形声字である。

部首の齒については既に報告した<sup>8)</sup>。甲骨文「齒」字は齒の象形であるといわれ、「止」は篆文

に至って加えられた声符である。

甲骨文(齧)字は下半分が齒の象形であるとされている。

上半分は「𠂔」と「止」である。

「禹」字について

「禹」は甲骨文字にはない。金文の「禹鼎」,「叔向父禹段」,「秦公設」<sup>9)</sup>に見える。前2者は厲王末か共和のころ(約840BC)といわれるが確かではない。「秦公設」は秦の哀公末年(前536~501)のものと思われる。即ち春秋時代のものであろう。

古録、古印にも禹字は多い<sup>10)11)</sup>。

「秦公設」の「禹」が禹の初文である。

「説文」に「禹蟲也、从内象形」とあり、古文一字を重文として載せている。徐箋<sup>12)</sup>に「禹為虫名 而从獸足之内 義不可通 疑當从虫从九 禹者蟲行屈曲 故从九也」とある。

「秦公設」の金文中に「秦公曰 丕顯朕皇祖 受天命 鼎宅禹賁」とあるが、この禹字は徐灝や聞一多のいうように、虫に従い九に従う形である(図)。

「秦公設」における虫の象形は、聞一多によれば、契文「𠂔」と同じである。また孫海波、商承祚<sup>13)</sup>は、「𠂔」を它とし、它と虫は同じで、許慎が虫它を分ったことを疑問としている。

そのほか、羅振王<sup>14)</sup>、高田忠周<sup>6)</sup>も、虫它是本来一つの字であったと述べている。

上記のように、「𠂔」は虫であり、它であり禹と同義である。

正字通に「蝕俗齧字」とあり、篇海に「蝕齒病朽斂也」とある。従って蝕と齧は同義の字で、虫と禹も同義であると考えられる。

古代の音韻からも禹と虫は同じ意味を表す文字と思われる。

以上に述べたことは、この形が虫形であると見てのことで、見ようによっては虫ではなく「人」にも見える。もし人ならば意味はまるで違ってくる。人としたのは高樹藩であるが、本字に関する彼の解釈はかなり苦しいようである。

高樹藩が「.:」を蠹（蟲）とし、「𠂔」を人とした理由は明らかでないが、引用の契文は乙3361の墨拓に酷似している。この墨拓では「𠂔」はむしろ人の形に見えるが、前、6、54、4の墨拓では人というより它に見える。鄴、3・、35、2ではどちらとも分らない。もしこれが它であれば「它」を蠹とすることは重複である。

「.:」については于、聞、楊各氏とも全くふれていない。高樹藩は蠹とし、高田はさんずいとした。

高田がこれをさんずいとしたのは、他の甲骨文字を参照すれば、形の上では或は正しいかも知れないが、汜は水があふれ出る意で、全体の字義が不自然である。

甲骨文では「.:」を小とする場合がある。小甲、小乙、小丁、小且乙、小辛等の王名や、小旬、小牢、小王、小臣、小告等の字を見ると本字上半部の形と酷似している。これは小它ではないかとも思われる。

「説文」に「小物之微也从八 1 見而八分之 凡小之属皆从小」とあるが、商承祚<sup>15)</sup>は、卜辞では小は微小の意で、許慎の説は初義ではないという。

李孝定は、物の微細の形を象るもので篆文の小は契文の小の変化した形である。許慎は篆体について述べているため「1 見而八分之」となったもので、この字はもとより1 八に従うものではないと言っている。

葉玉森<sup>16)</sup>は兩点の象形としている。

藤堂<sup>17)</sup>によれば、小は甲骨の字体によると、小さな点印を3つ記して「ちいさい」「ちいさく削る」ということを表わした指事文字であり、小も削も同形の語であるという。

この説に従えば、小は単に小さい它的意ではなく、它により齒が小さく削られる意を持つと考えられる。

そのほか考えられることは、みそぎのような水に関係した儀礼を表わす符であるということである。しかし御祭が水とどのようにかわるのか今のところ分っていない。

前に述べたように、この虫形を人と見るならば、「.:」は小ではあるまい。恐らく血液の流出するさまを表したものであろう。犠牲に供された人が血をほとぼしらせている形である。またこれが人でなくて他の動物であっても同様である。殷王朝の祭祀に犠牲はつきものであったからである。

上記のことから、この字全体の意味は、它によって齒が小さく削られていく形意を示すものか、あるいは小它的侵入を示すものか、または它による齒の蠹蝕によって血液が出るさまを示すものか、あるいは犠牲に供された人（または動物）が血を流している形であると考えられる。

## 2. 文意から

甲骨文字は物の形あるいは意味を象ることによって成り立つ文字であるから、その解釈にあたって文字の形態的構造を明らかにして、そこから原義を追求することは最も大初である。

しかしながら、字形のほかに更に重要なことは、まとまった文章中からその意味を把握することである。そのためには、その時代の思想や社会を基礎として、文章の意味を正しく把握しなければならない。

甲骨文が記録された殷代社会の状態を簡単に言えば、殷王朝は重要な国事すべてを卜占によって決定していた。卜占によって神意を問ひ、吉凶の判断を得て政治を行ったのである。

甲骨文は殷王朝第21代の王、武丁以後に、獣骨や亀甲に記録された卜辞である。

卜辞の種類には祭祀，戦争，狩猟，農業，王と王族および重臣の安否にかかる問題があり，その中に王と一族の疾病に関する卜辞があるとされている。

ここで注意しなければならないことは，胡氏の説も白川氏の説も，甲骨文中に「疾」字を認め，諸器官の疾病の存在を肯定した上での説であって，筆者はこの両泰斗の業績に対して深く敬意を表するものであるが，本説に対する異説として，もう一方の大家である赤塚博士の業績を挙げなければならない。

東京大学名誉教授，赤塚忠博士は，甲骨文と金文の膨大な資料にもとづいた研究をまとめて，中国古代の宗教と文化に関する大著<sup>18)</sup>を発表された。本著によれば，殷代の文化の特色は，一言に言えば，上帝を至上神とする多神教にあった。そして，上帝ならびに諸神に対する祭典は王朝の組織や統制の象徴であり，王朝を維持する現実的聖業であった。

殷王朝が上帝ならびに諸神を祭るには2つの場合があった。そのひとつは敵族国を征伏するに当って上帝ならびに諸神の祐護を祈ることで，これは臨時的行事であったが，他の1つは祈年祭で，これこそ永続的な王朝運営の盛典であった。

卜辞は概ねこの2つの範疇に含まれるもので，卜媯，卜夢，卜疾などはむしろ誤解であって，これらは卜祭祀のうちに含ませるべき性質のものである。

赤塚博士の説はこのような主旨のもので，疾病に関する胡厚宣氏らの説を誤解であるとされている。

胡氏が丁山氏の字解をもとにして「疾」と釈し，これが通説となっている甲骨文字は，牀上に人が横たわり血を流す象形を示しているが，この文字は疾病の意味ではなくて，字義通りに神前に人身犠牲をささげる意に解すべきであるとされた。

また，羅振王<sup>19)</sup>らが「齒」とし，胡氏が「疾齒」の例とされた「齒」字については，果たして歯牙の意味であるか否か明確でない。むしろ他の卜辞では

王占曰，吉亡來（齒）。（王占ひて曰く，「吉な

り，來（齒）亡からん」と。）（乙三三八〇 1）

王占曰，不吉。其以（齒）。（王占ひて曰く，「不吉なり。其れ（齒）を以るん」と。）（合二六八 1）

の例のように，その来入を不吉とされるもの名として用いられていることから，これを部族名であるとし，この部族は特殊な祭礼の場合には犠牲に供されることがあったであろうから，胡氏という「疾齒」はこのような儀礼を表わす文であるとされている。

その他，意味は明らかでないが，動詞として用いられた例もある。

赤塚博士が指摘されたように，本字を「齒」と解し，胡氏が「疾齒」と釈されたことは，一部の卜辞では意味が通っても他では意味が通らぬ場合がある。それゆえ胡氏の「疾齒」を赤塚博士の説に従って，族人の人身犠牲と解するならば，むしろ合理的であると思われる。

この立場から甲骨文「齧」字を考察すれば，本字は齒中に虫入る形とするよりも，「疾齒」の場合と同様に，人身（あるいは動物の）犠牲を伴う儀礼を表す文字と解される。

従って

貞，于甲御帚燥（齧）。（乙3661）（合232）

は，「武丁の父陽甲の靈に御祭を行って，帚燥の齒痛をなすものを修祓しようか」とと解すべきではなく，「陽甲の靈に巫先としての帚燥が（齧）なる儀礼をすすめようかと貞う。」の意とすべきであろう。

本文は疾病などではなくまつりごとに関する一文であり，（齧）字は現在の齧の初文ではない。

本文中の「御」については，王国維が「禦祀也」として以来，禦（ふせぐ）の意であることが通説となっているが，赤塚博士によれば，これはふせぐではなく，物を進獻する意である。即ちここでは父王陽甲の靈に犠牲を進獻することを意味するのである。

このような儀礼は主に祈年祭の行事として行われたが，時には戦の生儀としてささげられた行事であった。

穀物のみのりも戦争も、国の運命を左右する重大事であったから、殷王朝は上帝に対し、直接間接に犠牲を捧げて神霊を呼び、神の祐護を祈ったのである。

島邦男氏<sup>20)</sup>は、胡氏の「疾齒」を同様に「疾齒」と解され、上記の甲骨文を「貞う、父甲に帚好の齒疾を御せんか」と解されているようである。しかし「齒疾」とはされていても「齧」字とは言っておられない。

また「御」については、方国の来寇と災害、祈年、疾病に対して行われるもので、これらの害悪の禁禦を祈る祭祀にはかならないと言われている。

「帚燥」（島氏の「帚好」）の帚は羅振玉<sup>14)</sup>の積であるが、羅氏はこれを婦字の仮借とした、郭沫若は「婦」と解し、「故妣」と同義とした。胡厚宣<sup>21)</sup>、陳夢家<sup>22)</sup>もこの説に従っている。

しかし島氏は「故妣」とは解されず、この字は「服」の仮借で、四方に配置されている王の親任の大官にかならないと説明されている。また「好」は金文の「保」であり、帚好は個人の名ではなくて世襲される称谓であるとされた。

甲骨文例によれば、帚某はしばしば征伐に従事している。また地名にもなっていることから、帚はそれぞれの土地と関係があるものと考えられる。氏はまた帚某の疾病の記録もあると言われている。

島氏のこれらの記述をまとめると、甲骨文「帚」の字音は母、巫であって、その名に地名が用いられ、征伐に従事し、疾病について卜され、祭祀に与っていて、王の親任を得ている直属の臣「服」である。「服」は殷の辺境にあって外寇にあたり、治安と営田に任じていたものである。

## 総括

上述の諸説を総合して考察すれば、通釈の「貞于甲御帚燥（齧）」なる一文は、「殷王の重臣帚燥が齒疾を患ったので、父王陽甲の靈に禦祭を行って、その靈惑を修祓しようかと卜問する。」と解するか、または「殷王の重臣帚燥が、何か政治上の大事にあたって、父王陽甲の靈に犠牲を進獻し

ようかと卜問する。」と2通りの解釈が成り立つ。

筆者はむしろ後者の解釈の方が自然であると思う。その理由は、甲骨文（齒）字の解釈を齒牙の意とするよりも族名とした方が多くの文例で通りがよいということ、また「疾」は人身犠牲を意味する形であり、従って甲骨文（齧）もまた齒疾とするよりも、神前に供える犠牲の象形とする方が甲骨文の本質に忠実な解釈であろうと考えるからである。

勿論、前者の解釈のように、この字を「齧」とし、本文を「齧」の治癒を得るための修祓に関する卜問とする解釈を完全に否定し去ることはできない。たとえ「疾齒」では解釈できない卜文があるとはいえ、筆者は胡氏の説を否定し去る絶対的根拠を持たないのである。

ただ筆者の見解では、胡氏の言うように、卜辞中に武丁とその一族の疾病に関する文があり、それが身体各器官について問われ、あたかも現代医学のように各科が備っていることには反って不自然さを感じずるものである。

筆者はかつて胡氏の説に従って、甲骨文中に殷人の疾病に関する卜辞があること、第6図の図形が「齧」の初文であることを述べた<sup>23)24)</sup>が、その後の研究でこの解釈に疑問を持つに至ったのである。筆者の誤りは字形の解析にとらわれて、甲骨文全体の持つ文化的意義に基づく文意の解釈の検討が足りなかったところにある。

本論文では于省吾氏以来の「齧」字説に対する疑問を述べ、この文字はむしろ神前に供する犠牲を象るもので一種の儀礼であろうとする筆者の考えを明らかにして、今後の甲骨学の発展による解明を持ち、諸先輩の御批判を仰ぎたいと思うのである。

終りに臨み、永年にわたって中国伝統医学を御教授下さった恩師岡部素道先生に対し、深甚なる謝意を表します。

甲骨墨拓書名

○印は書名の略称として採った文字を示す

殷虚書契前編 羅振玉 1913

小屯殷虚文字乙編 董作賓 1948~1953

戦後京津新獲甲骨集 胡厚宣 1954

殷虛文字綴合 郭若愚 1955  
鄭中片羽三集 黃濬 1942  
殷契粹編 郭沫若 1937

### 文 獻

- 1) 于省吾：釋齒，雙劍謠殷契駢枝（石印）47，1940.
- 2) 聞一多：釋齶，聞一多全集選刊ニ，古典新義，古典出版社，北京，557，1956.
- 3) 楊樹達：釋齒，積微居甲文說卜辭瑣記，中国科学院，北京，8，1954.
- 4) 李孝定：甲骨文字集釋存疑，甲骨文字集釋，中央研究院歷史語言研究所專刊之五十，台北，14：4468，1970.
- 5) 高樹藩：正中形音義綜合大字典，正中書局，台北，1974.
- 6) 高田忠周：古籀篇，1925（復刻版）宏業書局，台北，1975.
- 7) 白川 靜：媚龔關係字說，甲骨金文學論集，朋友書店，京都，441，1974.
- 8) 戸出一郎：中国における齒字の起源と変遷，齒医史，4：2，1976.
- 9) 白川 靜：金文集4，列国，二玄社，東京，1973.
- 10) 陳鐘齊：十鐘山房印學，文史哲出版社，台北，1946.
- 11) 王 常：集古印譜，文峰出版社，台北，1945.
- 12) 徐 灝：說文解字注箋
- 13) 孫海波撰，商承祚校：甲骨文篇，芸文印書館，台北，1934.
- 14) 羅振玉：殷虛書契考釋，1914.（石印）
- 15) 商承祚：殷虛文字待問編，民国刊.（石印）
- 16) 葉玉振：殷虛書契前編集詁（復印本），芸文印書館，台北，1966.
- 17) 藤堂明保：漢字語源辭典，学燈社，東京，1975.
- 18) 赤塚 忠：中国古代の宗教と文化，角川書店，東京，1977.
- 19) 羅振玉考釈，商承祚類次：殷虛文字類篇附檢字，1923（石印）
- 20) 島 邦男：殷虛卜辭研究，汲古書院，東京，1975.
- 21) 胡厚宣：甲骨學商史論叢（復印本），大通書局，台北，1972～3.
- 22) 陳夢家：殷虛卜辭綜述，中国科学院考古研究所編，科学出版社，北京，1956.
- 23) 戸出一郎：甲骨文に表れた殷人の疾病について，齒医史，3：2，1975.
- 24) 戸出一郎：甲骨文に表れた齒牙疾患について，齒医史，3：3，1976.